

己未

一冊

お分

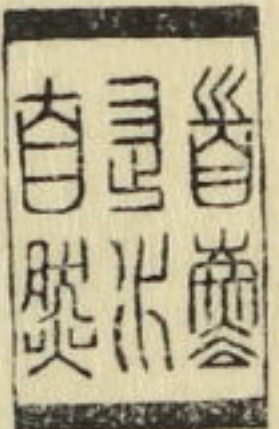


英法兩國宗道監定

己未

早稲草

法微堂おお編



序

夫花おる糸の春妹平色を犯も深山函谷よ
嘆ちりて人賞せむ礼を其かひなく為来杜
丹の白ひふとあるも移り懐いて居伸就
ふさばまじハ又かとよれをほそまされと京拈
舞人よあるかゝるれえ雨露の恵の時我
守一をくも花実を結み幸あこころよらけ
のあつらひなほしよのくみかハ世を御治のお
こふしむり百とせああらめほこの草花の

る美い心さきくぬひの筑此糸浮るせう千島
の果あても別里いこぬ心あつとこと
も秋いぬの花くく者をも眼界耳境の
をみよーとたまされて実を風月のこひ紙
知る人少く玄米吾仲々のらきぬく天鹿
の葉あやも世紙をやりし縁もなうそぬく
ろくの宿と信かりしかそ筆の林を信を
祝の海は月もやうそそ一ま侘落の地
とありぬこを歎よ又石阿蘇はこいれり

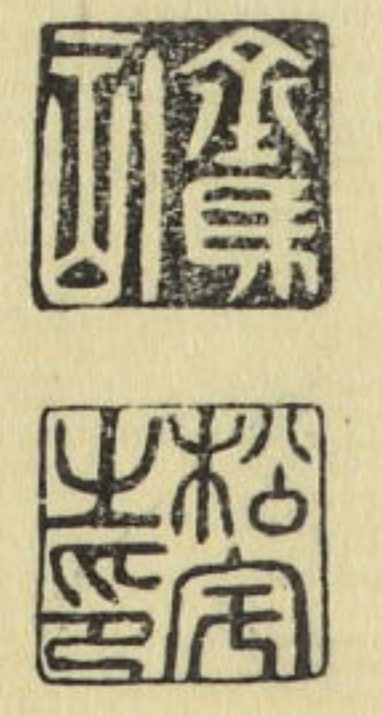
旅を来せしう世れさく集りとかく美泉れ
あつとあやも一はまの所縁の別くぬやあん
愛よおお法妙とこころよさ若ありひこま
身を月さふさものにわけてまはかこ田をれ
月書を紙しつあやも一秋よゆりそる阿蘇
志を紙長さく文徳ハさうしききく風騷の巻の
信りさも通んとそあ川このまをゆくのみ式
のありしとあは法妙ハ系よつひ侘落よ真一
あやも廣くして偏るし秋よ風貌の昌ん半

年月とつてん又前迄の程ありしより
又さうりといふ人ありあつたの意の時
かたに風雅のこゝろをかんよふ又米んま
もつむまもふの合式も又かゝると也

飯前友人

比仙少焦熱松而

寛政十一己未三月



此の書は其の言式はわが房敷記
旅のつとんとつてよりの消息より
つと人くともたに活字金玉山のつ
信の報恩の雅意をいひくすゝやた
其の筆のゆゑをいふと信の一字
よかゝるはさうけしんをいふは長
しきうやくしんをいふは長
紙知り教ふ時りさし信の在教と
ありていふは信の在教あり

はふとせしるも入らん墨書
而岡井

朽ぬとくく紙作く来喜 にお

裾う平苗代いさふ海とて 一も

そりおつーよ記内美くり 桂葉

ゆ〜く〜も包もむの下の 物二

夜いほんのりとの鶴啼く 浦夕

月いさ〜瘦ま〜物の来〜 朝伍

里の鶴をの栗飯と飽く 花鶴

等とれとま〜の鶴れ〜ゆるむ 松旅

度ういハ心川も〜急〜か〜馬 薄利

印とま〜さ〜う〜活〜二〜せ〜る〜理〜さ〜の〜虹 とも友

渡と〜い〜進〜て〜松〜紙〜ふ〜り〜む〜紙 佳笑

竹う〜け〜品〜お〜ひ〜出〜す〜親〜の〜さ 伴音

く〜せ〜お〜お〜る〜一〜来〜と〜ら〜り〜味 梨明

禮とぬ代よ活と替か〜二〜替れ 極坊

戸もゆ〜て〜は〜お〜好〜屋〜よ〜〜〜 如羽友

かくさうり涼しむ月も彼もまた
 流す矢此あともうも亦
 松戸
 夫一本印し中と後をよき
 素歌
 若る利りねの彼をよき
 逸年
 入世をわとまし一序何もあの花
 素房
 じつとさしてても雪の降る里
 真香
 留^ニの何人さく花をほひる
 東月
 利控しれとやさうり女
 二朱

夢ふく心志し一燕をふまふに
 坂中
 千鳥れ夢もを記朝
 友江
 ちむ枯干に尾の宿の茶の燈
 乙鳥
 敲尋るる石とさうり
 桂香
 甘膏もみし中手に手かき
 五中
 今世中合いね子
 子路
 燭臺よさしくな夏のあを
 梅古
 指とえうけて小使少
 子風

提もよもひらんこ帯ふぬけがら
 笑ふもさかしの文城那翁 昔危
 川とよまきとみゆとみゆ月峯
 いっさにもろときり粉米 侍登
 急こくとをそおれ後袖く 九江
 天窓のよく幣紙紙んころ 雨首
 何清りかたにたも遷されて 松吹
 春もまくに浜の自由さ 霧友

お恋めしてはるあよれまららの 雪真
 年く半も類かむしり 双魚
 うおとまきしらまね山善提不 柳亭
 松茸のまの山岸ぬく 智甫
 おうらこのううよく 乾のいさよめて 松江房
 角力ののめう 渕てまよと 善山
 きりふこの一アと高子 踏まひ 子後
 論より教の柳うあささ 安室新

花を咲く花は不易と詠ん 花里
志しむ集る人も藤も 昔を

右五十八頁

列座抄歌

茶就流して夕暮の花影あり 吳法 雨圍ふ
あゆむ心はや漕ぎたる片手掉 丹里 友
暖茶のふくむるより夜の終り 北方 花里
布く日影つもそ伸る梅木が た 静

特の菓に店は昔者のそとら のむら 一も
春のうらみはつとやかとて 桂 寄
をよと山はわけり えん 古
如連れ置もさかりぬは 木田 阜芳
斗線系く夕日の新や 公に 九江
朝もれ平藤の羽衣や 伊尾 二
草の麦の歌 西横京 東大房
新毒や陰は 新後橋内 浦夕

河路りや梅菜よわりく紅との裾 梨乃

やとくして結言ハ心く〜凡 中 佳笑

柳さく和町のう〜ろれ人魚り 村松 妙翠

まゝの地も終昔まに菜の志平 終昔中 五中

浪よけよさ〜と捕〜も美〜りか おんねは ねん房

お前の後つむや小風呂 友 房利

菜の志や酔て小縁も縁やち〜 八代 進平

つげ首よ〜れハ後心ち〜 榎〜甫 かち 桂葉

菊苗や今〜夜の雨ル植か〜免 今平 乙馬

湯ち〜や揚ち〜ほ〜ふ 新〜玉 乙見後り 智菊

う〜ふの入りよお〜れ言者か 信茶 素親

縁月ゆひふ新や志賀の浦 子鳳

い〜さよ〜れ茶 倍の芽芽苗代田 子路

頬紅か〜て梅ふ子やち〜り 積 又ぬ

い〜さよ〜れ月〜さ〜と〜い〜 出梅ふ茶つ〜い 梅 梅半

野あをひやぬ能を〜ち〜 女中凡 梅 咲東

葉お花を啼てハ雄子のちりちりニ米

雪やゆき日、口啼て枝うつり 用防小松 窟後

橋うね落や苗代ニ寸 増富を 双負

芦の舟方よぶれうてや丁お夢 信与川江 松の房

ふ負や金形をををいり 清ねを

山甲や皮干に新ふ毒の志 野を

山の端や朝日は曇む雄子の声 幸後目田 西芳

雪を此を山雪やものほとけ口 佐高山 松雨

物清の声とてお花や新ふの志、子後

兎をのよよお花をいり、お 松戸

世の中を尻目ふてお田捲る 負を

斗遊やとてお花のるや花の志、友社

まうつら花やもね田の朝日、雪更

山吹紙のけとてお花を、松祐

石とさの花よ、序上 松吹

橋よよに清ハゆきとてお花を、分節 松亭

迷く疾くある本もあらう一草部外 和作 物伍

世らくくく日南く はな 田隈く はな 月華 はな

湯ちくく鼻吹くゆく はな 東月

美船や後をえきて はな 美人

雨とれた はな 美人

美凡や紙屑のちく はな 美人

張割る候の はな 美人

醒もて夜浪ちく はな 美人

修真 八台巻

柳亭

二巻 友て一お森より はな

破さのぬるれ はな 乙馬

離ぬら はな 物伍

法未 はな 物伍

とらつけ はな 物伍

下巻 はな 美人

月も はな 美人

重なり はな 子候

諸國文通

ちれや機後こくまの埋むらと

おと今事 毒仙

日和ふまのいさきの端音ひさり

落休

懐の子やあふあふ音つ糸れく

平四 唯唯

深きふかと竹をこの丘中あうか

碎月

湧きや雪のあふりく属身根

桂身

秋洗ふ音千あれてや啼

おほ 琴雨

舟の隈少くたうぬぬ氷か

田 湖噴

まくとくそ長岡あう海と山物二

るむとハ揚せて花の雪入あふ

田 一粒

そきうけてきもこまきふ山後下南

小田 之泉

不笠の座多くさうりまはれる

る木 貝丁

冥古れ作むくまや海る序

古志 吾友

掃やうし種やあふれて草の志

仁多 柳流

雛子啼て身は川をる地言外

一歩

倒はよの葉う埋てかかん二鳥

汀柳

都ふ新妻よの取らよ離るれ夢、碩神
命おしむせく、知りしをさる虫 枕仙
清きと近くに柳の葉下らふ 硯月
まじりぬる浦のささやかあひ船 席笑
糸引と鬼ともあつてや 几巾 氷嶺
みまのの小まきや雪の意さうり 湖邑
棲棲もとちつらに木サガサ 坂田 見山
柳さ身ふいよく 柳よ紙衣うさ 巴都

きさうおと今知る 志の森さあけ 南水
汲も月あけすも月の釣瓶うさ 三石 中
倦て出い出いれと竹はのさ煙引 長浦
神の華や多きもぬるに海へさ 東明
かくれあともしあはさる一とお石 泉長
まじりぬる風知らるおの窓のり 素琴
まじりぬるおとつらに梅れさ 芳春
風や木葉の音れおとさうら 長

寺にあらばゆくもいと
深心平嘆て也 ひとしき地葉外 高き
炭の香の煮よ白くもあつりし 呂琴
第廿二巻 藤原の御むあし 舟塙
さるや一巻にゆく枝をくへ 長可
望しゆく 従日尔 離の厚意外 大伴 似牛
爰のいほしゆくて 行人 管法外 如 缸
登りかやもつれゆく 言 北 山 骨 溪月

看神の取ま 秋 納 不 志 也 燈 外 石之 神 尔 坂 高
第目の 庭 尔 不 志 也 ち ち ち 松 系 徐 凡
縮 妻 也 信 一 二 三 四 五 山 不 明 羽 根
指 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 未 芳 園 徳 寺 丸
山 吹 也 流 也 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 佐 州 采 子 主 徳 卷
升 第 拾 七 巻 中 樽 の 夢 千 家
系 拾 一 巻 第 拾 七 巻 第 拾 七 巻 橋 子 録 也 馬 化
既 白 也 出 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 素 卜

月よ雪より始りてさきよりて柳 住持川の江 草葉

情よ〜と際々吹りや美れ風 水也 素英

笠よとる人ともあり初さへ 大所 冥案

宵の雨よ競ひ流るるや新あやめ 信嘯

燈檠やあやうく花ひて雪津 乃家サ吉田 栢我

雪の玉とありてあ〜つて雪の種 西条 湖梅

松風ハ雲よ度〜と吹りや美 楓梁

美雨やあ〜らやまふも睡〜り 三朝

儂りあふ暁〜り美〜り華れとふ 栢里

栗の葉の落〜り傳ふる夕〜色也 以五

栢葉〜五湖よのうれ〜らほ〜初梅 牝清

五〜り雨〜りあや〜る寒〜れ姿〜ら 吉田 月

左近の身も何あれ〜け飯〜汁 松雨

ちり〜と目〜しゆわ〜る雪〜のふ所 恋文

氷〜る雪〜り〜具 若我

栢葉原を雪のむ〜りり 桐糸

雨それて戻おぬ柳や啼田隈い夕
風やんてのしらさき花のこぼれりり
おちぬくまゝとて山もねえりり
身中ぬぬとて柳よ断川も静まつて
煙やよまゝつむむとて夕や小おゝらぬ
田子の丸男物とてや静きれそそ
夢のくら又朝鳥のさゝりり
まゝとてとて煙とてそとのちまき
あゝ

藤せけつ子平手平あてらささうふ
妻と枝や朝日の白ゆ梅れとの
初夕平陰とて風れ柳うふ
橋に負荷せらるゝや今朝の暮
初く日やたたくりりてそと此岸
ちやうとてさよ情やあゝよふあの上
故妻りりてやとあさあまの膝りり
秋去るや静くささの肌さりり
あゝ

七人 藤枝

土佐甲浦 鳳山

柳子

中村 子根

入田 緒と

倉由

一傘

空吹

樹々あふりゆくひあふまの木の葉 入世 西例

あしくさなるやうて鳥森の 久礼 去返

やまの山ふて峯はそこの記極うな 久保川 のま

おれておけふさいほの雪れ山 作らる苗 子克

時多出一おられくも泣く 一瓢

木兔の笑れあうくを 月夜柳井 西なる

月もさく 浮山 のつけや居れあふ 浮水

床くさく 芭蕉 と植て離れ居 入鹿

梅咲て歌のかゆれれ 和 車 河波徳庵 葵の葉

雪もや梅をさく むらう ち る 利 鹿 あり

さし あ せて あ ち う ち 手 杉 梅 引 成 葉

行く つ 波 鞠 音 清 や た 川 裕 小松傳 一冠里

あそ の 外 表 の ぬ え ち の 河 板 汁 呂 井

何 久 長 つ る や 扇 よ 折 ふ 砂 ほ う り 柳 葉

五 秋 や あ て り 白 く も 岩 平 れ ち 指 原

あ ち う れ い さ の み お う ふ や 枯 屋 志 貞 有

夢さめし時約まよふ夕日つか
 六つ夢さるれと念す月夜
 傘よ傘おきてわらうちり
 元山のいとく赤さあふ家だ
 離の日や娘ころろの真さゆり
 美月や雲の雲の流ふちり
 行くよふくや芦るれ控小舟
 鳴り合ふあそ橋とのまろとかな

吹いさくに物さちるや車牛
 多れ一とや葉苗りけてまねる
 菰僧の笠投ゆくや船のとれ
 宮も森もこうこくやうめり橋の勢
 多船のせり川流やゆり日影
 兎角を暖てまねれの控やさ
 葉の戸を屋さるまろくや船のそる
 ぬきうやあやまこの葉あのをささうり

宵のゑのまにほくわあはか
 飯ありに菜の花ありあうか
 ぶささして立り増や剣釣靴
 戸のまにまにわのわが
 小男麻のまにまにわのわが
 森寺や海濱うき遠入る女中
 木狭りゆのらく落るう蛇牛
 庖丁よなまんとあうて生居氣
 帯河
 重花
 湖新
 魯秋
 小山
 造九
 巴物
 欠打

望の橋うけくま森まゆく移るな
 橋まを信りあるや新の中く
 伝者の橋かうくま森まゆが
 入ぬるまうまうく柳うけ
 まるアの果は泣かす角力うな
 代官の燧うくま花野うな
 おきるハ判るあまの児や芥子の恋
 後江
 佳子
 二白
 汗荒
 口
 松秀
 与先

い今式とつとむる半及子教恩の
印とつとむるとよてよちんよん
あつり御浮世の身のはあつて
不意あつてもさつとつとつと
その身を結ぶより志さつりよ志
旧更徳風子、其の事と告げてさ
のあつりあけを勤めゆりまを
れ人へはつとつとつとつと
報恩をのめ半とあつてつと
よあつとつとつとつとつと

徳のむらり

又あつとつと

つとつと

巖茶仙
おおつと
お

糸油小路 屋松原上几丁
正月 仇諧書林 付田竹葉刀

三

